

第六章 夏の冒険

暑い夏の間、アボンリーの女の子たちは自分たちの庭でパーティーを開きます。

ある日、ダイアナが大きなパーティーを開きます。

ダイアナは自分のクラスの女の子たち全員を、招待します。

ダイアナのお母さんは、おいしい食べ物や飲み物をたくさん作ります。

昼食の後、彼らは外で遊んで、大いに楽しめます。

誰もがおしゃべりしていて、笑っています。

「何かわくわくするようなことをしようよ！」とダイアナが言います。

「いいよ」と彼女の友達のジョシーが言います。

「私、あなたのお家の前にある高い木に登ることができるわ、ダイアナ」

「気をつけてね、ジョシー」とメアリーとサリーが言います。

ジョシーは高い木を登り始めて、てっぺんに到達します。

彼女はとても満足です。

「さあ、すうごくわくわくするようなゲームをしよう」とダイアナが言います。

「誰が私の家のでっぺんまで登ることができるかしら？」

「あなたの家のでっぺん…」とジョシーが言います。

「でも、それは危険よ」

「いいえ、危険じゃないわ」とアンが言います。

「私は勇敢よ。私、それをできるわ！ あなたの家のでっぺんまで登ろうと思う、ダイアナ」

「やめて、アン！」とサリーは言います。

「それはすごく危険よ」

アンははしごを取って来て、家のでっぺんまで登り始めます。

アンはゆっくりと登りますが、それはとても難しいです。

突然、アンは地面に落ちます。

「あら、やだ！」と女の子たちは叫びます。

女の子たちはアンのところへ走って行き、「アン、アン、あなた死んでるの？ 何か言って！」と言います。

アンの顔は青白く、アンは言葉を発しません。

アンはゆっくりと目を開けます。

「私は死んでないわ、でも足がすごく痛むの。歩けないわ」

ダイアナのお父さんは、アンをグリーン・ゲイブルズの家まで運びます。

マリラはアンを見ると心配します、なぜならマリラはアンのことが大好きだからです。

「どうしたの？」とマリラは尋ねます。

「心配しないで、マリラ」とバリーさんが言います。

バリーさんはマリラにゲームのことを話し、全てをマリラに説明します。

数週間後、アンは体調が良くなり、学校に戻ります。

ステイシー先生は親しみやすい先生なので、アンはステイシー先生が好きです。

ステイシー先生の授業はいつも興味深く、アンは宿題をするのが好きです。

ある春の午後、マリラは家に帰りますが、アンが見つかりません。

マリラはそこら中を探します。

「アンはどこだろう？」とマリラは思います。

「アンはまたダイアナと遊んでいるのかしら？」

マリラは心配になります。

夕食前、マリラは2階のアンの部屋へ行きます。

部屋の中は暗く、マリラはベッドの上にいるアンを見ます。

「どうしたの、アン？」とマリラは尋ねます。

「具合でも悪いの？」

「ああ、マリラ」とアンは悲しげに言います。

「私の髪を見てちょうだい！」

「緑色だわ！」とマリラは驚いて叫びます。

「どうして緑色なの？」

「市場に新顔の男がいるの。彼は毛染め剤を売っているのよ。私は黒い髪が好きだから…」

アンは言い終えることができず、泣き出します。

「まあかわいそうに！」とマリラは言います。

「きっと黒髪の染料が、赤毛を緑色に変えるんだわ！ あなたの髪を洗いましょう」とマリラは言います。

しかし、緑色は消えません。

「私、学校に戻れないわ」とアンは言います。

「女の子たちや男の子たちは、私のことを笑うわ。私どうしたらいいの？」

「私に考えさせて」とマリラは言います。

「私に考えがあるわ。あなたの髪を短く切りましょう」

マリラは、アンの長い緑色の髪を切ります。

アンの友達がアンの短い髪を見ると、彼らは驚きます。

「あなた、短い髪が似合うわね、アン」とダイアナは言います。

「ええ、本当に」とジョシーが言います。

「私はそれが好きだわ。私も髪を短くしようと思うわ」

数週間後、アンの髪はまた赤くなります。

ある夏の日、アンとその友達は川浴いに腰掛けています。

彼らはそこで古いボートを見ます。

「そのボートでゲームをしよう」とアンが言います。

「私たちのうちの一人がボートに乗って、大きな橋まで川を下るのよ。他の女の子は橋まで歩いていけるし、私たちはそこで落ち合えばいいわ」

アンはボートに乗り込んで、川がアンを橋まで運びます。

しかしボートは古く、突然、水がボートの中に入って来ます。

アンは泳げないので、怖くなります。

ボートは水の下に沈み始めます。

アンは危険な状態にあります。

「私どうしたらいいの？」とアンは考えます。

その時、アンは大きな木を見て、手で枝をつかみます。

アンは寒くてぬれており、動けません。

「助けて！ 私を助けて！」とアンは大きな声で叫びますが、川には誰もいません。

突然、アンはボートを見ます、そしてその中に一人の男の子がいます。

それはギルバート・ブライスです。

「アン、君はここで何をしてるんだ？」とギルバートは驚いて尋ねます。

アンはギルバートに古いボートのことを話し、ギルバートはアンを自分のボートの中に引き入れます。

「ありがとう」とアンは冷たく言います。

「友達になろうよ」とギルバートはアンにほほ笑みながら言います。

「君の髪は今じゃ、とてもかわいく見えるな」

「私はあなたの友達じゃないわ！」とアンは怒って言います。

「分かった」とギルバートは言います。

「僕は君にもう二度とお願いしないよ！」